12月16日：凱旋-リザルト-

さて…………そろそろ目を逸らすのも限界になってきたぞ。他の誰も言い出さないし………あーもう、俺が行けと。

「あ、あの……ウル・イディム氏？」

「ム」

「そのぉ………なんか、不機嫌だったりします？」

「ソノヨウナコトハナイガ」

ほんとぉ？ なんかもう……全身が刺々しいというか触れるもの全てを傷つけるキレっぷり(・・・・・)なんだけれども。

ウル・イディム氏は自称オーク、もとい「オウク」？なる種族であるらしい。発音が似たオークは頭が豚か猪の巨漢といった感じのデザインだがウル・イディム氏は巨躯である、という以外は全く異なる容姿をしている。そもそも目は六つあるし牙は完全に肉食生物のそれ、全身の甲殻はどちらかというと甲殻類と甲虫をごちゃまぜにしたものを殺意でコーティングしたような刺々しさだ。下手に触れたらこっちの手が切れそうなくらいの。

それが………トマホークを撃破してから、さらに進化していた。もはや甲殻というよりも鎧の形に加工した刃、としか言いようがないキレッキレの外殻。いいや、あれはまさしくトマホークの刃殻だ。俺たちを散々苦しめた刃の装甲と同質のものに置き換わったウル・イディム氏……彼に一体何が起こったのか。

いや十中八九仕留めた相手の性質を取り込んでより強大になっていくタイプのモンスターじゃんね。このオークさんが行きつく先はどこなのだろうか……

「いやぁ……なんというか、すごく……その、キレのいい面構えになてるじゃん？」

「ウム………マレニダガ、倒シタモノノ力(チカラ)ヲ、得ルコトガアルノダ」

いやそれ仕留めた相手の性質を取り込んでより強大になっていくタイプのモンスターのやつ～。

やはりこの人、最終的に人類に絶望して「もはや人類を滅ぼすしかない！」とか極論に走るタイプのラスボスなのではないだろうか。最後に人の美しさに触れてちょっと態度軟化させてから死ぬタイプと、バカな！この私がぁぁぁ！って死ぬタイプの二種類あるけど果たしてどちらだろうか……いや、あきらめてはいけない。人の善性を見せ続ければきっと心強い味方でいてくれるはず。

「サンラクくぅん、サンラクくぅん」

「なんだよ」

「ちょっと耳元でえっちなこと囁いてみて……！」

「わっっっっっっっっっっ！！！！！！！！！！！！」

「脳にキくぅ！？」

とりあえず耳元で叫んでから頭にチョップ。他にも視線を向ければダメだ、一人はマガジンに頬ずりしてるし一人はハルバードを今にも舐めそうだし一人は地面をのたうち回りながら儀霊剣を振り回している。この場にいるの人間の悪性寄りの連中ばかりじゃねーか。もうおしまいだーっ！！

「まぁ、なんだ……ウル・イディム氏。今回の討伐はアンタが前線を張ってくれなきゃここにいる何人かは間違いなく死んでただろう。協力感謝する」

「ム…………私モ、波濤ノ人ラニハ驚カサレタ………マコト、強キ力(チカラ)ヲ持ッテイル。共ニ戦エタコトヲ誇リニ思ウ」

すごくいい人だが、常時厳戒態勢みたいな姿になってしまったせいで「用済みだ、では死ね」と言い出しそうで永遠に怖い。とりあえず握手という概念が王狗にもあるらしく、手を差し出してきたので覚悟を決めて握手……あっあっあっ爪というか指そのものが刃物みたいに鋭いからスリップダメージ入ってるスリップダメージ入ってる！ これもうナイフを握りしめてるのと変わりないが！？

「コノ手ヲ恐レズ握ルトハ……ヤハリ波濤ノ人ハ……ミナソウナノカ？」

「どうだろうな、そこまで根性があるのはそうそういねぇぜ？ ま、俺も余裕で出来るがな……！」

「おっと？ そういう度胸試しなら僕も乗るよ。ちょっと待って一応体力回復させる」

「徹夜を共にしたら仲間、でしょう？」

「んふふぅ」

何故か突然始まったウル・イディム氏との握手会。多分本人が一番状況が理解できていないだろうがこっちも大概ノリで動いているので説明ができない。とりあえずディプスロが背中から生えた第三の手で握手したところで一巡したので握手会は終了。

「……とりあえず、キャッツェリアに戻って報告かな」

「ミノタウロス？ の拠点じゃなくてか？」

「場所が分からん」

とりあえずキャッツェリアでクエスト進行しないならそこからミノタウロスの拠点とやらに遠征だな……うーん、どんどん人里から離れていく。

「ま、とりあえず………真なる竜種討伐！ お疲れ様でしたーっ！！」

……

…………

………………

朝です。基本的にここにいるメンツはゲームの為に徹夜上等なので多少のけだるさはあるが概ねパフォーマンスに変化はなく、ディプスロの転移魔法でキャッツェリアに戻ってきた俺達はとりあえずサミットが行われていた会場を訪れる。

「………ム」

いた。ミノタウロスの女王の………アスティ、えーと。

「あー、見つけたぜミノタウロスの女王様」

「貴公ラ………あノ、恐ルべキ、竜は…………」

すっ、とウル・イディム氏を指さし、そして各々が竜滅装備(バスターアームド)を見せつけるように立ち………最後に、俺がアラドヴァルを掲げて一言。

「療養中のご主人に朗報を送ると良い。仇討ち(・・・)は俺達が確かに成し遂げた……ってな」

どう見ても頭が牛そのものなのだが、驚愕と歓喜の表情が確かにはっきりと認識できるのはやはりシャンフロの恐るべき解像度と言うべきか。ともかく、俺達はユニークモンスターやレイドモンスターに引けを取らぬ強敵、真なる竜種の討伐に成功したのだ。

じゃあ生まれたばかりのウル・イディム氏は丸っこかったり今の姿と違ったのかというとそうではなくて、取り込んだ因子を時間経過で自分に還元するので最終的に最初に出会った時の姿に戻る。ただ戦闘時になると肉体が変形しだす

今回はサイナが飛んだりサンラクが跳んだりしてたので使わなかったけど飛翔態があるし、今回獲得した斬竜態もまぁ大概ヤバい

部分的に再現されたジェネリックトマホーク君ですからね（ただマナ消費が激しいので多用できない）